

Newsletter

FEBRUARY 2002

http://www.aack.or.jp

目次

●特集 AAC Kのゆくべき	A4 AAC Kサロンの提案	広瀬 幸治……………1
●A5 AAC Kは生き返れるか	高尾 文雄……………2	
●A6 AAC Kの将来は学術登山か	安仁屋政武……………3	
●A7 壁があれば登ろう	新大地がそこにあるではないか その 北村 泰一……………4	
●臨時特集		
●ビデオ『ヒマラヤへの道』を観ての観想		
●「映像史ヒマラヤへの道」を見て	山口 克……………8	
●AAC K七十年に想う	藤本栄之助……………9	
●ヒマラヤへの道を観ての感想と提案	北村 泰一……………10	
●ビデオ『ヒマラヤへの道』を観て	睦好 正治……………12	
●梅里雪山始末記	小林 尚礼……………13	
●「ベルケオ」の研究	寺本 巖……………15	
●お知らせ		
●講演と映画の夕べ	睦好 正治……………19	
●京都大学総合図書館	瀬戸口烈司……………20	
●会員動向と訃報	……………20	
●訂正	……………20	
●編集後記	……………20	

A4 AAC Kサロンの提案

広瀬 幸治(理・化 一九五三)

わたしは、卒業以来ほとんど京都にいなかったし、AAC Kの若い世代とはあまり接触がないので、その将来について発言するのは気がすまないが、北村編集長の要請もあり、わたしなりの意見を以下に述べる。

わたしは、AAC Kは昭和一桁の時代にヒマラヤへゆくために創設された組織と理解している。当時では、それだけで十分に挑戦的であったが、それが、実践にむすびつくのはようやく戦後のことで、やがて時代とともに、みんながヒマラヤに登りたがるようになり、いまや、カネさへだせばチョモランマの頂上までひっぱりあげてもらえるような時代になった。いまでも世界に未踏峰や未知のルートはたくさん残っているし、やりようによっては、その社会的な意義はむかしの比ではない。Pioneer Spiritはあらゆる分野でいつの時代にも貴重な精神であるが、登山については社会的なインパクトがちいさくなってしまったことは否定できない。AAC K設立の目的はすでに達成された。かつては、われわれにとってヒマラヤ遠征のためにAAC Kは必要不可欠の組織であった。いまでは、べつになくても

いい。だから解散してしまってもいいが、このような実績のある組織をつぶすのは、それをつくるよりむづかしい。大変なエネルギーが必要だし、そんなうしろむきの仕事は面白くないから誰もやらない。それにAAC Kはまだ役にたつこともあるだろうし、会員がいろいろな分野でPioneer Workをする時の精神的な支柱になる、ということもあるかもしれない。

そんなことで、つぶれもせずダラダラと続き、次第にサロン化してゆく。会員のなかに過去の栄光を背負った元気でクレバーな年よりがいっぱい。これは、企業なら倒産パターン。先の短い年よりが、AAC Kの将来について議論するというのは、第三者から見ればマンガではないか。若い人はうつつとうしいことだろうと思う。そこで提案。会長はじめすべての役職に定年制をもうける。たとえば五十才。それ以上の年よりは一切口をださず、すべての運営は若手にまかせる。そのかわり、高齢者のためにAAC Kサロンをつくる。

ここでは文化的サロン活動のほかに、もちろん登山や探検もおおいに結構。AAC K本体とサロンとは協力してもよいが、基本は対抗意識をもった競合関係である。たとえば、若手がフリークライミングをやりに出せば、これは年よりにはちよつとむり。そこで、若手にできない何かを考える。ひよつとしたら、案外活気

がでてくるかもしれない。高齢化時代にふさわしい案ではないか。

以上でわたしの提案はおしまいであるが、最後にひとこと。梅里雪山はどうするのか。遺体収容に努力された方々には心から感謝するが、それで、この山をAACKは登る気があるのかないのか。登る実力がないのなら、AACKがスポンサーになつて登り屋を雇つて登らせれば、それで一件落着。これは何年前の総会で私が提案したことであるが、あまりとりあつてもらえなかつた。遭難した人たちのためにも、また、あの遠征には世間から募金をあつめていたということもある。梅里雪山をどうするか。もうすんだことにするのか、これから決着をつけるのか、これをはつきりさせてからでないと、次のステップへはすすめない。これはもちろんサロン側の仕事である。

以上は、ヤジ馬的意见であることを自覚しながら、あえて提案する。

筆者短介…住友化学勤務。勤務中のオーストリア、スイス滞在を利用して、同国の山に頻々と登山。ノシヤック(一九六〇)。

A5 AACKは生き返れるか

高尾 文雄(農・農経 一九五八)

AACKが初登頂主義でがんばっていた時代はどうに過ぎてしまい、今残った会員はこの社団法人という社会的意義を求められる山岳会を持って余しているようにもみえる。

AACKが生まれた当時は山登りにはロマンが

あり、八千メートル級の未踏峰がたくさんあった。また、辺境の地は地球上にたくさんあり、そこに行くこと自体に世間もロマンを感じていた。

だから山岳ドキュメンタリー映画ができ、一般の客がたくさん見に行った。また、遠征隊にも寄付が集まった。

ところが、アンナプルナで人類が八千メートルに登ることができると証明され、世界最高峰のエベレストも登頂され、どんどんと「価値」のある山が無くなり、一般人からはロマンを共有することが無くなり見離された。登山者の中からも色々なバリエーションや、より厳しい季節の登頂が成功するにつれ、ヒマラヤの未踏高峰自体を登ることを目的としたヒエラルキーがあつた山登り(形式)が壊れていき、価値観やスタイルどんどん多様化の中で、旧態依然のAACKはマンモスのように過去の遺物化しているのではないだろうか。しかし、社団法人であることで変わって行くにもなかなか急に変われない。

AACKが初登頂主義を貫けなくなっている登山の現状は、

一、高い山(八千メートル級)で未踏峰は無くなつた。

二、今残っている未踏ルートでさえもかなり困難で、われわれの今の実力では不可能に近いところしかなくなつた。

三、政治的、宗教的、地理的に入り込むことさえ困難な山も現在ではかなり少ない。また登山としての意義は少ない山が多い。

四、高くない山であれば未踏峰は残っているが、かなりの技術的、体力的困難が伴うか、まっ

たくつまらない山か、政治的に閉ざされた山である。

また、われわれAACKの実力は

一、若い会員が少なく、また山岳部も部員が少なく山登りの実力がかなり低下した。

二、梅里雪山の遭難で数少ないまだ実力があつた人間を失つた。

三、その遭難の後始末のためにかなりの時間と労力をつぎ込み、他の山に行く力が削がれた。

四、国内での山登りをAACKではやらないので、実際山に行くパーティーシップが無く、創造的な意見を戦わす場も無かつた。ロマンを語り合う仲間と場が無かつた。

五、夢となる山がすでに登られていて無くなり、会の大きな目標となるものが無い。

六、会員がどんどん高齢化している。実働の会員数が減っている。

七、山岳部出身者以外からの新入会員がほとんど無く、あつても新たな組織の活性化には程遠い力しかない。

八、山岳部の実力低下も激しく、とても遠征に行つて先頭に立てる人はいない。

このAACKの状態をどうするか、

一、大きな山登りを過去にやつた会員のサロンとして細く長く生きながらえる。

二、初登頂主義以外の新たな共通の目標を会を持ち、それを目指す。

(目標設定がかなり困難であるが、もう一度、現在とこれからのパイオニアワークとはどんなものであるかを議論しあいながら、新たな

目標を探る)

目標を探る)

三、会員が色々な個人的にまたは小さなグループでロマンを持った計画を立て、それを金銭面、許可取得交渉においてサポートする組織とする。

四、とりあえずこのままならだと続けて、時代が変革し、誰かまたカリスマ的な人間の出現を期待する。

五、困難性は無くとも他の会では入れない「辺境の地」(政治的、宗教的)を選び登る。

六、学術研究に重点を移して、研究対象として山を見て、誰もやっていない、気づいていないことを山の上でやる。

いずれにしても、山登りそのものは単純であり、登ってみたいところに行くだけなのです。人に言われて行ったり、人や組織から強制されたり、名声のためだけに行くのではなく、自分のため、自己満足のために登るのです。

とにかく国内でも海外でも手近な山に行動することから始めるのはどうか。山に入れば何か見えてくるものがあるのではないか。行動を起こすことから始めるのもひとつの方法だ。山に行つて語ればまた色々な考えが浮かんでくるようにも思う。山に深く入つて、焚き火で、テントで山を、パイオニアワークを語り合えることを始めよう。

A6 AACKの将来は学術登山か

安仁屋 政武(文・地理 一九六七)

二〇〇一年十月に開かれた今西錦司生誕百年記念シンポジウムの講演の際、AACKに関して二つの大きな特徴が挙げられた。第一は誰でも知

ているヒマラヤの初登頂を目指す団体として結成されたこと、もう一つは、会員に大学関係の研究者が多いことである(平井さんの話では、確か三分の一程度だったと思う)。ヒマラヤ登山を目指して結成された山岳会は他にも多くあると思うが、会員の約三分の一が大学関係の研究者という山岳団体は少なくとも日本では他にないと思う。

しかし、第一の特徴であるヒマラヤ初登頂の目標は、今や死んだも同然である。七千メートル級の未踏峰はほとんどないし、六千メートル級の山は現在個人で集合で手軽に行くことが可能で、大げさに山岳会の力を結集していわゆる遠征隊を送る時代ではない。

とすると、もはやAACKの特徴を活かせるのは、第二の研究者が多いということではないだろうか。今までも、登山隊に学術隊員を参加させ、x x山学術登山隊と名を打って遠征隊を出してきた。学術的な成果はその時々でいろいろであったと想像するが、少なくとも「学士」(あるいはAcademic)山岳会の名前に相応しい形ではあった。

初登頂を目指す山がある地域は、学術調査の面でも空白なことが多い。このような地域では、学術分野とメンバー構成によっては世界的な学術成果を挙げる可能性が大きい。例えば、山は未踏峰ではないが、シシヤパンマのヒマラヤ医学学術登山隊は学術面でもすごい成果を挙げたAACKの遠征隊の代表ではないだろうか。私の専門分野である地学(氷河地形)からみても、この地域は非常に魅力的である。というのはい九六〇年代に中国が初登頂したとき、同行した中国の氷河地形学者が、ここに分布するモレインを調査して、ヒ

マラヤの最終氷期の編年を行った。しかし、他にこの地形を調査した人は未だに少なく、最近ヒマラヤの他の地域の氷期の研究が進むに連れて、この結果を疑問視する声も出始めている。この調査はい九六〇年代の文化革命のまった中の中国で中国人のみによって行われているので、私は地学の隊員として参加し、現物を見て、年代測定の資料を採集し、この成果を検証したかった。しかし、事前に情報が入らず、計画を知ったときは全てが決まった後であった。

シシヤパンマの遠征隊はAACKの第二の特徴に基づいて成果を挙げている。これはAACK存続のためのこれからの方向性を示しているのではないだろうか。すなわち、もしAACKがこれからも存続していくのなら、既登の山でもいいから、そこで世界的な学術成果を生み出す可能性があるような所を対象として、遠征隊を組んだらどうだろうか。既登の山でも学術的には未開拓な所は世界中にたくさんある。しかし、こうすると、学術と直接関係のない会員は行き場を失うような感じを持つかもしれない。けれども、AACKの会員の中には大学関係の研究者以外でも単に山に登るだけに飽き足らず、自分の興味に従って何かを調べたり、学術隊員の調査を手伝ったりすることに別な満足感を覚える人も大勢いるのではないかと思う。会を挙げて初登頂する山がなくなつた(梅里雪山は別である)現実を前に、ヒマラヤ初登頂主義をかざし続けてなにになるのだろうか。もちろん、会員個人レベル(あるいは会の後援?)で六千メートル、五千メートル級の山の初登頂を目指すことはあつて然るべきだろう。

私は一九八三年から南米のパタゴニアで氷河と氷河地形の調査を行っているが、このような環境の厳しいところでの調査では、山の経験がある人間とない人間で差がある場合が多い。条件が厳しくなればなるほどこの差が大きくなる。私はここにA A C Kの活路を見つけ出せると思う。例えば、A A C Kで学術調査と登山を組み合わせたプロジェクトを募集し遠征隊を出すというのは、一つの場合である。こうすれば、他大学出身の若い研究者で山が好きで、あるいは山岳地域を研究対象としている人がA A C Kにいままでにはなかった魅力を感じるかもしれない。現在の活動状況では他大学出身の人に入会を呼びかけるのがためらわれる。会員名簿は最近の後半の部分の厚みが加速的に増しており、今のままでは自然消滅するのが目に見えている。これを食い止めるのは若い人の入会以外ない。日本のヒマラヤ登山史上で一つの時代を築き、大きな足跡を残している山岳会として、自然消滅はあまりにも惨めではないだろうか。再生（若い人を増やす）のためになにか新しいことを始めるか、あるいは名があるうちに解散するしかないだろう。

A7 壁があれば登ろう。

新天地がそこにあるではないか—その1—

北村 泰一（理・地物 一九五四）

S O 序論の序

『京都（大学）学士山岳会』とは、山に登ら（れん会）だとカゲ口をたたく人がある。初登する山

がなくなつて久しい。確かにこのところ、A A C Kはウロウロしているように見うけられる。

『何を！俺は未踏の岩壁を登るんだ！』と、フリークライミングでも何でも、ワンサカという尖鋭的なスポーツアルピニストを相手に互角に戦うフアイトのある人は、この稿を読まなくてもよい。

私にはそんなコワイ未踏の岩場に挑む情熱はない。だいいちそんな岩場は登れない。そんな鋭い尾根をゆく力はない。

しかし、困ったことがある。自分も京大山岳部出身だ。それにA A C Kの現会員だから、世の『山のぼり屋』には負けたくない。A A C Kは二流の山岳会だと思われたくない。つまり、『誇り？』だけは高い。そうだ。私の気位は高いのだ。

私は、中学の頃から思っていた。友人は、何事もスイスイ出きるのに自分には出来ない。自分は能力がないのではないかと。しかし何かをした。だから、いつも考えていた。力の弱い者が、どうしたら力の強い、いわば強豪を向こうに回して互角以上に闘うか、と。

京大山岳部へ入った。そしたら、

『エベレストの第二登より、低くとも、未知の峰の第一登者たれ：』と。

私は思った。なるほど、これだ！と。

『初登主義』、なんていうとカッコよく聞こえる。

だがよく考えると、これが、唯一の弱者が強者に勝つ方法ではないか。ただし、前提がある。我々は、幸か不幸か（幸なのである）京大（山岳部）に入岳（学）した。京大というところは、一流三流ではおさまらないところなんや、と教えられた。二流三流で満足できるならこれほ

ど楽なことではない。一流であろうとするから苦しいのや。

山に登りたい。だが力は弱い。しかし一流でありたい。というなら、『初登主義』『初踏査主義』を掲げるしか道はないではないか。

山というものは、登れるルートがどこかにあるものだ。『初登』なら、どんなルートを択んでもよい。アルピニストが見て、価値のないようなルートでも、それが初登なら許される。力のない者が、登り易いルートから登頂し、それが価値あるものであるためには、それは『初登』しかない。そうでなければ、より困難なルートでないと価値を見出せない。そんなところは登れない。だから、我々には『初登』『初踏』しかない。

重ねて言う。力が強ければ、七大陸の最高峰のすべてを征服し、不可能に近い岩壁をのぼり、八千メートルの巨峰の峰と峰をむすぶ稜線を縦走し、北極を一人で横断し、南極をソリを曳いて歩くがよい。これらは、現状の探検界・登山界の、なお価値ある行動といえよう。しかし、これらは、誰でも思いつき、そして歩む『正道』である。

だが、我々にはそんなことをする力はない。とすれば、横道に入つて、正道をゆく本隊に追いつき、出来れば、その前に出たいではないか。そんな道はあるのか？『イエス』、ある。しかし、それはきつと『ぼくの前に道はない：』（ハイバラの道、道なき道）（高村光太郎）に違いない。

パイオニア・ワークとは、人が気づかない道をゆくことであり、A A C Kが一流であろうとする、生きる道はこれしかない……。ならば、そんな道があるのか？重ねて答える。

イエス。それは必ずある。しかし、その道は、普通にしておれば見えない。一見不可能に見える道だ。だから人が気がつかない。それを探そう。これが、この特集の目的だ。(第一回目)

この稿を準備するにあたり、人々に尋ねてみた。若い世代にも問うてみた。異口同音に答える。初登主義はよくわかってる。だが、そんな初登の峰はない。だから、『初登主義』はもはや死語になってしまった、と。そして、『初登』『初踏』なしで学術のフィールド・ワークの道を探したり、名誉ある解散を論じたりする。

しかし、この稿では、『初登』『初踏』しかないA A C Kが、どこまでその哲学を貫けるか、を論じる。

『探検とは、知的情熱の肉体的な表現なり』である。あくまでそれを追求し、体を張って知的情熱を満足させることを考える。

S 1 序論

今回、平井一正氏の努力により、『ヒマラヤへの道』A A C Kの七十年』と題するビデオが公開された。それをみると、戦時中のこともあったが、A A C Kには、水平的な広がりを求める探検派と、垂直的な高さを求める登山派とが混在・兼在している。

卒業するとき、山の仲間を『垂直派』と『水平派』にわけた。当然ながら、大部分が『垂直派』だが、自分は密かに『水平派』を宣言した。そして、南極の氷原を犬と駆け(一九五七)、北極の寒さに震えた(一九八〇)。世界の未開地であれば、アマゾンの湿地帯であろうと(一九八九、一九九三)、サハラ乾燥砂漠であろうと進んだ(一九八

六、一九八七、一九八八)。熱帯多雨林の小枝から落ちてくるヒルにおびえ、砂漠ではテントに入りこむサソリに悩んだ。

その後、わかい世代で南極へ行った人は何人もいるし、そういう水平志向の族も多い。だから、A A C Kは、幅ひろいスペクトルをもつ山岳会でも、垂直組ばかりではない。だが、水平組も垂直組も、その共通キーワードは『初登』であり『初踏』である。

さて、この『初登頂主義』『初踏査主義』が行き詰まって久しい。ヤルンカン(八五〇五メートル、一九七三)までは、隊を出すことに誰も疑いを持たなかった。サルトロ(一九六二)の頃から、そろそろ将来を気にしだしたが、まだ、断固とした目標がヒマラヤにあった。未踏の八千メートル峰を登り、『初登主義』を実践するのだという目標を誰も疑わなかった。

本ニュース・レターの特集のテーマ『A A C Kの将来ゆく道』とは、旧くて新しい永遠の課題である。A A C Kが存続する限り、それは永遠の課題である。

昔から、このテーマで何回も議論してきた。公開されたものとしては、A A C Kへの批判とその関連文を含めると、私の知る限り、最近のものでは、

- (一) A A C K時報#三、『サルトロカンリ座談会』、一九六四
- (二) A A C K時報#四、『A A C K解散論』、本多勝一、一九六五
- (三) A A C K時報#五、『A A C Kは解散すべきか』、酒井敏明、一九六六
- (四) A A C Kニュース・レター#二、『A A C K

の黄昏に想う』、本多勝一、一九九六

(五) A A C Kニュース・レター#三、『何故私はA A C Kに入らなかつたか』A、B、C、D、E、F、G君、一九九六

(六) A A C Kニュース・レター#三、『A A C Kに関して思うこと』、内藤望、一九九六

(七) A A C Kニュース・レター#三、『A A C Kの抱える問題点』、中村真、一九九六

(八) A A C Kニュース・レター#五、『A A C Kの将来と現状を考える』、座談会出席二十名、一九九七

(九) A A C Kニュース・レター#七、『縮小加速・ヒマラヤの氷河とA A C K』、上田豊、一九九七

(十) A A C Kニュース・レター#七、『これから山登り』A A C Kの今後に向けて』、今井一郎、一九九七

ビデオ登山史『ヒマラヤへの道』京都大学学芸会山岳部の七〇年』、二〇〇一 平井一正編集 などである。

初期のA A C Kニュース・レターにはそれらしい記事が載っていたが(四) (十)、いつしか(十七、一九九七以来)載らなくなってしまった。これという決定版が発見できなかった故だろうか。それとも、熱心に提唱しても、その筋がそれを取り上げなかつたせいだろうか。

今回、性懲りもなく、また、『将来への道』をとりあげ、特集することになった。それは、この種の議論は一回で結論が出るものではなく、時間が流れている以上、議論も同じではないはずだからである。また、その都度構成メンバーも異なり、

だから、意見も異なったものが出てくる可能性があるからである。

それに、もう猶予は出来ない、という焦燥感もあった。猶予どころか、遅すぎる！という焦燥感もあったからである。ウロウロしているAACCKに若者が入会しなくなり、AACCKはどんどん老化していった。このままだとジリ貧である。AACCKは自然消滅である。ノホホンと呑気にしておられない。一刻も早く何とかしなくてはならない。遅すぎるが、一刻も早く『夢』を見つけて、若者を呼び戻さなくてはならない。

この『AACCKのゆく道』の特集をするにあたり、私は、編集長として前会長の高村デルファ(秦雄)氏に『AACCKどこへ行く?』という表題で一稿をお願いした。

同氏は『AACCKはどこへ行く?』とは人聞きが悪い。これではまるで『闇夜にただよう帆かけ舟』ではないか。私なら『ようこそまできたAACCK!』……と書く、と叱られた(#二十二、二〇〇一年十一月号)。

これは立場の相違で、デルファ氏は、AACCKを内部からミクロに眺め、外部に見えない苦労をし、私は外部からマクロに眺め、理想ばかり言える立場であるからであろう。

私は、このデルファ氏の『闇夜にただよう帆かけ舟』という表現が大変気に入った。そう、現在のAACCKは、まさに、この『闇夜にただよう帆かけ舟』ではないか? ヤルンカン以来、AACCKは、長年、行方定めずフラフラと漂ってきたような気がする。勿論、この間、幾多の遠征があったし、それぞれは“成果”をあげているが……。

遭難も痛ましい。『大昇天経験』(川瀬裕史、AACCK二ユース・レター#二十二、二〇〇一年十一月)をしたとはいえ、帰って来なかった松田ランブ(隆雄氏)のことも、元氣一杯で出ていった宮木(靖雅氏)が北極の冷たい海に消えてしまったことも、それに、K12や梅里雪山の痛々しい遭難者に想いを馳せた時、いつも胸はキリキリと痛む。

すでに、めばしい未登頂峰も未踏地もなく、AACCKの若者たちは、個人的に未踏の岩壁をよじ登り(登山技術として重要だが)、未踏ルートを登ったりしてウサをハラしているように見える。だが、私には、それらの行動には心の底からの『確信』がないように見える。それらの行動が、どのように、未来への『夢』に連なるのだろうか、と疑わせる。

今思えば、北岳の冬季初登攀(一九二五)などや、冬の知床半島の遠征(一九五二)は、やがて自分達が向かう大きな『夢』(ヒマラヤ)を実現する準備行動ではなかったか。隊員たちは、無意識にせよ、この道は、やがてヒマラヤ(夢)に通じると思っていたのではないか。

現在はどうだ? 若者は、何かを求めて未踏の岩を登り、未知の谷を朔行している。高年齢になっても、数千メートルの高峰にのぼり、体を鍛えている。だが、その先にある『夢』とは何か?

それを探そう! と思っはじめてのがこの特集である。こんどこそ、『将来の夢』が見つかるかも知れない、そんな期待でこの特集を始めたのである。(第二回目)

そんな夢が見つかったとしよう。その『夢』は、

とても実現不可能に見えるに違いない。だから『夢』なのである。しかし、夢の実現に何より大切なものは、それに注ぎ込む『情熱』である。その『情熱』と『若干の能力』さえあれば夢は必ず実現する。『若干の能力』なら我々にもあるぞ。

卑近な例を示そう。

京大のアメリカン・フットボール部である。京大に入学して初めてボールをもったような学生が数年の後に、関西なら関学、関東なら日大などの強豪を倒して甲子園ボール(学生全国一を決定する大会)で優勝し、さらに、ライスボール(社会人団体を含めて、日本一を決定する大会)まで優勝するとは誰が想像し得ただろうか? 京大アメフト部は、一九八三年以来一四年間に、全国一位(学生、社会人を含め優勝)が七回、二位(学生全国大会で優勝)が四回、四位、五位各一回という成績を挙げた。

その秘密は何か?

それは『ぼくの前に道はない……』の実行、とそれへの『情熱』。これしかない……。

京大アメフト部が、他のアメフト部と同じように練習のみを強化(それは必要だが)したのでは(王道を大勢の人と同じように歩む)、他の強豪にかなう筈がない(他大学のアメフト部では、既成選手が、名監督などの下に、もっと長い時間と金をかけ練習を重ねている。その練習量は、京大と比較にならない)。つまり、『量』で競争しても勝ち目は無い。とすれば、『質』で競争するしかない。このことを拡張延長するようになる。

AACCKの近頃の山行きは、フリークライミングを楽しみ、未踏の岸壁を登ることにパイオニア

の匂いを嗅いでいるようだ(それしかない、と思ひ込んでいた)が、そういう山登りでは、他の山岳会にかなうはずがない。

京大山岳部出身者、AACK会員で、未踏の岸壁を登り、七大陸の最高峰を全部征服し、ヒマラヤ八千メートルの巨峰を全部登攀し、北極を徒歩で横断し、南極大陸を独りソリを曳いて歩いた『野郎』はいるか？

そんなタフな人間はいない。しかし、だからと言つて、我々が二流三流の岳人であることを自認するわけにはゆかない。そんな、二流三流の山岳会(AACK)には用はない。

ならば、どうするか？これが、この稿の目的である。(第三回目)

大正から昭和のはじめ、ヨーロッパから帰つて来た、いわば(登山)留学生は、ヨーロッパ登山家と同じようにスイスアルプスの岩壁をのぼり、困難なルートを開拓した。

帰国してからも、その頃のヨーロッパに定着していた方法、つまり、ガイドをつれ、ナーゲル(皮靴に鉄鉋(ナーゲル)を打った登山靴)の音を谷の岩に響かせて日本アルプスを闊歩した。カナダの山などにも外征した。

しかし、わが今西氏たちは、ワラジをはき、谷を音もしないように静かに歩いた。そしてヒマラヤに着目した。本当はナーゲルを買う金がなかったのかも知れない。

当事、ヒマラヤという名前すら知る人は少なかった。どこにあるかも、まして、そこへ行くのにどれほどの費用が必要であるかもわからなかった。

だから、そんなところを目指すと言つて現実感

がなかった。

ヒマラヤは、ヨーロッパの少数のグループにこそ知られていたが、日本では、ヒマラヤをまともに口にし、その実行を志す人は殆どいなかった。これはまさに、『僕の前に道はない……』ではないか。『道なきかたに道をつけ……』ではないか。

今、私は、おこがましいが今西氏らの立場に身をおいて考える。今、初登の山がナイ、ナイといっているのは、ちょうど、昭和の初め、スイスアルプスの峰々はみな登られて、もはやスイスアルプスには未登峰はない、と言っているのと同じではないか。情況が良く似ている。こういう時は、今西氏らの思考の跡をたどるに限る。

今西氏は、こう考えたに違いない。人が知らない道……気がつかない道……。とても実現可能とは思えない道……を歩こう、と。その時、今西氏らには、ヒマラヤの高峰が、AACKの力で登攀可能かどうかは、本当は不安であつたに違いない。だが、西堀氏も桑原氏も、当事の人々はその実現に向かつてあらゆる努力をした。それを実現する情熱をもつていた。

つづく人達、工楽(英司)氏や近藤(良夫)氏をはじめとした人々もそれを支えた(二ユース・レター本号、山口克氏の稿参照)。餓狼(廿二、二〇〇一年十一月号、岩坪五郎)も集まつてきた。そして、どうだ！未踏の八千メートルどころか、八五〇五メートル峰(ヤルンカン)を登つたではないか。

現在は、昭和のはじめと同じだ。羊(AACK)がライオン(他の山岳会)に立ち向かうためには、道なき方を行くしか方法はないのだ。

ならば、それは具体的に何か？(第四回目)

だが紙面も尽きた。思わせぶりのようだ、それは十一月号に述べよう。

もう一度言おう。それは必ずある。気がつかないところにある。不可能と思われるところにある。

『編集子註』『AACKの道』の原論文(Aシリーズ)は、二〇〇二年十一月号をピークとし、あとの一年はAシリーズの批判に重点が移されます。だから、皆さんの『AACKの道』の意見は、次号五月号、次次号八月号、そして、遅くとも十一月号に掲載できるように、投稿ください。

皆さんの投稿文の内容が、本論文のつづき『A七』その二、本論』と同じでも勿論構いません。その時には、北村氏はその論文の支持にまわるでしょう。会員諸氏の自由な考えを投稿されることを望みます。

『編集子註』私が、京大山岳部に入つて驚いたことは多い。その一つ。私達の時代、ひとつの山行、特に合宿などが終わると必ず反省・批判会が持たれた。そこで徹底的な批判が行われた。激しく、口を極めて……という方が真実に近い。私は、これが京大山岳部の特徴かと理解した。それが、山岳部のそしてAACKの発展の原動力になっている、と理解した。のちにいくつもの団体に関与した。私はこの批判精神が衰えないように努力した。やがてその団体は他世代に移った。そして批判を口にしないようになった。まもなくその団体は衰微していった……。

「映像史ヒマラヤへの道」を見て

山口 克（工・燃化 一九五二）

今西さんの生誕百周年記念の催しのとときに（二〇〇一年十月六日）、初めてこのビデオを見た。その時受けた印象を率直に云うと、一寸下卑た言葉になるが、「後継者に恵まれぬ、瀕死の重傷を負った、七十過ぎの年寄が若い日の栄光を想い浮かべて、オナニーを楽しんでいる」というものだった。

製作を担当した平井（一正）によると、これは会員全員に配布するもので外部へ出すものではない内部資料だ、とのことだが、会員に配布する前に、今西さんの催しのとときに一般の人々に公開した意図を私ははかりかねる。昔からの古い資料をこれだけ集め、整理した実行力の持ち主は、平井をおいて他に居ないと思うだけに、此の様にA A C Kの現状を顧みないで、いかにも外部へ誇らしげに語りかけている様に思えるのは私だけだろうか。このビデオは編集をプロの製作者にまかせたので仕方がないというものの、私には、「A A C Kの現状を知らない第三者のファンが製作したものだ」としか思えない。

その根拠を、以下、箇条書きにして示すと、

一・全体として見ると、敗戦までの記録はそれなりに良くまとめられていると思うけれど、戦後のアンナプルナ以降のチョゴリザ、ノシャツク、サルトロ・カンリ等の本格的な登山についても、探險地理学会・学生部だった先輩の系統を継いだ者達がプロモートしてきた様な印象を受けるが、実

際は、この様な探険派の先輩ではなくて、山岳派の鈴木信、今西寿雄らの先輩の系列の者がすべてプロモートしてきたことを強調すべきであった。それは映像にするのが困難でも、ナレーションで出来た筈である。（註 文末）

二・新聞やテレビの報道では、ヒマラヤ登山の場合、隊長や登頂者の名前だけを強調し勝ちで、このビデオもそれにならっているが、ひとつの会の内部資料として保存しておくのなら、八十才前後の老人ばかりでなく、A A C Kがやつとヒマラヤ登山において、社会や一般の山岳会にその実績を認められ（アンナプルナでの登頂不成功後、再度の計画実現までの六年間、今は亡き林さんと脇坂らが如何に苦勞し、結果をだすことの重要さを痛感したかを、聞き出せないのは仕方がないにしても）、黄金期のチョゴリザ、ノシャツク、サルトロ・カンリの隊を成立させたプロモーターとも云える当時の若手であった酒井敏明、高村泰雄、岩坪五郎ら（平井は地の利をえず、金沢（大学）においてそのような寄与はしていない）にインタビュもせず、単に登頂者としての名をあげたに過ぎないのは、認識不足も基だしと思う。

平井自身、神戸大学において、ヒマラヤ登山隊を率い、幾度も登頂成功の実績を積み、A A C Kだけでなく、一般の山岳会の人達にも称賛を浴びているのだから、頭（カシラ）にたつものが如何にすぐれているかも、それを支える若いエネルギーに満ちたプロモーター達が居なければ、計画は実現しなかったことは、よく解っている筈であり、会としての内部資料として残しておくなら、このよ

うな部分がいり重要なものではなからうか。結果も重要だけど、山という自然を相手とする場合には、プロセスが更に重要と思うのだが如何？今西さんの催しの直後のビデオに対する批判に対して、ユース・レター二十二号（二〇〇一年十一月）で平井は言い訳がましく工楽（英司）さんと鈴木（信）さん等のことを記しているが、私が云いたいのは、工楽さんが京大教授をやめて参議院文部専門委員となり、戦後の外貨不足にも拘らずA A C Kの海外遠征実施に決定的とも云える寄与をされたこととか、近藤（良夫）さんがカンペンチンの隊長として行かれたことよりも、アンナプルナ、チョゴリザ以降の事務局を担当して、それを一手で取り仕切りチョゴリザ初登頂成功の後でA A C Kを社団法人にするために、数度にわたっての文部省との折衝に苦勞され、その後の募金活動が如何に容易になったか等に一寸でもふれるべきであった。

三・最初にあげた、我ながら露骨とも云える印象の最大の根拠となっているのは、梅里雪山の隊のことには一寸ふれただけでお茶を濁していることである。梅里雪山の遭難隊員の遺した貴重なビデオのことに一切ふれていないのはどうか。平井は知らなかったというけれど、私は、そういうものが有ることを、彼に伝えた明確な記憶があるし、彼が老人ボケする程の歳でもあるまい。

当時、隊員が梅里のベース・キャンプに遺していったテープを、救援に行った隊（横山ら？）が持ち帰り、それを至急整理編集するように私が依頼された。七本程あったテープを夜通しかかって整理し、まとめて二時間程のものにしたのがある

筈である。それには、隊の神戸出航から、昆明―大理―麗江―中旬―徳欽―B、C―C2―C3?まで撮られていて、C2の科尔付近から、梅里の稜線からのバツトレス状の尾根を望遠で詳細にとらえたものもあり、カクネ里の底の様などころのC3らしきものも映されている。AACKがこの前代未聞の重大事故の後、再度の試みもままならず、また、遭難者の遺体の収容も未だ残っており、現在取り仕切っている首脳部も苦慮している現状を平井も知っている筈なのに、何故簡単にやり過ぎてしまったのか。ニュース・レターの二十二号に出ている前会長・高村の菌切れの悪さ、岩坪の云う餓狼の出現の期待と、そんな餌があるのかという不安感等、嘗ての首脳陣の苛立ちと悩みが平井には解らなかつたのだろうか。

四 最後に二、三の点を指摘しておく、カラコラムの山で目標をチョゴリザと決めた経緯を、今西さんが、一九五五年にバルトロ氷河のコンコルディアに達した時に、チョゴリザを見定めて決めた、ビデオのナレーションで云っているが、これは全くの誤りで、コンコルディアからはチョゴリザは見えない。もう一日行程行った所でやっとあの秀麗な姿が見られる。これはチョゴリザ登頂四十周年記念(一九九八、平井主催)でバルトロへ行つた人達も経験している筈だ。これには我々チョゴリザ隊員にも責任があるわけで、改めてAACKの正式報告書を見てみると、本文は対談形式なのだが、その中で、チョゴリザを選んだ理由として、今西さんの発言で、一九五五年のバルトロ入りのときに、コンコルディアで遥かにチョゴ

リザとバルトロ・カンリを見て、チョゴリザに決めたというのがあった。これは大きな誤りだ。地図で見ても、明らかにコンコルディアからはチョゴリザは見えないことが解る。コンコルディアからは真つ白のバルトロ・カンリとコンダス・ピークが見えるだけだ。今西さん程の人がそんな誤りを犯すとは信じられないが、実際はそうなのだ。この対談の最初ときに、隊員全員が居たかどうか不明だが、若し居れば、それを指摘していた筈だし、亦、校正を隊員が担当していたのなら気が付いていた筈だ。しかし、隊の正式報告書に、此の様な、山を見間違えた記述をしているのは、隊の責任であることに違いない。

次に、こまかいことになったこととして、AACKとなすけられた経緯のところ、ナレーションでは英語読みでなされているが、元々はドイツ語で云われていたことを年配の人は知っている筈だ。

最後に、ナレーションで梅里雪山を日本語読みをしているが、これはテレビやラジオで報道機関が云っていることで、AACKでこれに関わっていた人は、全員中国語読みで云っていた筈だ。中国語通の平井が何故これを訂正させなかつたのか?一寸気になったので:。

(註) 私自身は、吉良、梅棹、川喜田、藤田等の探険地理学会・学生部だった三高山岳部の先輩達の書かれた山岳部ルーム日記を読んで、三高時代に探険的登山に大いに啓発されたが、マウンテンクラフトそのものは、直接には鈴木信先輩とその系統を受け継いだ山岳派の先輩達から教わつたのである。これら探険派の先輩の系統

を引き継いでいるのは、本多や荻野等が創設した探険部の人達であつて、彼等ではヒマラヤの七千メートルの未踏峰には登れなかつた。

ビデオ『AACKの七十年』に想う

藤本 栄之助(理・化 一九六〇)

AACKが創立された一九三二年という年は、満州事変が勃発し、それから十四年にもおよぶ暗い戦争の時代に突入した時期である。その二年前には、NYのウォール街で株が暴落し、世界不況が始まっていた。このような暗黒の時代に世界中が陥つた時に、AACKが創立されたことは特筆すべきである。

先輩たちの中に、「今西錦司には動物的な嗅覚があり、西堀栄三郎には動物的な敏捷さがあつた」と話していたのを、私はよく憶えている。

今西らは、当時の状況から、日本は確実に破滅への坂道を転がり落ちて行くことを、その動物的感覚から予知していたに違いない。彼らは、燃え落ちていく虚構の跡に、自分達の勝利の証として燦然と輝くダイヤモンドを残そうとして、AACKを創立し、困難な条件下にもかかわらず未知の世界への探検に挑戦し続けたのだ、と私は確信する。

東北地方のうち続く飢饉、軍部の極右化、学者やジャーナリズムの無力化など、当時の暗い世相の中で、白頭山厳冬期初登頂や大興安嶺探検などのニュースは、青少年たちに大きな夢を与えたであろう。次々と京大に俊才が集まつてきたのはそのためである。

長い戦争が終わつても、日本にはまだ混乱の時

期が続いたが、当時少年だった私は幸福だった。AACKのカラコルム・ヒンズークシ探検、南極越冬隊そしてチヨゴリザ登頂などの記録映画から、熱い想いを受け取ったからである。私が京大に入学し、誇りを持って学ぶ喜びを知ったのはそのためである。京大は、私以外の多くの若者たちにも幸福を与え続けた。今時、そのような大学が何処にあるだろうか。

二十世紀は戦争の時代と呼ばれるようになった。科学が発達したために、その分だけ悲惨な、非人道的な戦闘がくりかえされた。東西の冷戦、南北の亀裂、宗教の対立、民族独立への弾圧など、戦争への理由はいっぱいあるだろうが、人間が人間を殺していいという論拠などある筈がない。そういう時代にあつて、AACKはバイオニア・ワークの旗印の下に、ヒマラヤやカラコルムへ、そして南極へと足を伸ばし続けた。これは、人間が未知の世界を知りたいという知的活動であつて、戦争とは合い対する生産的行動である。

未踏峰を目指すことが如何に知的な行動であるか、それは登頂者 (Summiters) がすべて三十代から四十代の人であることからも分かる。ノーベル賞受賞者も殆どがこの年代にした業績に対して評価されていることを見れば肯ける。

若者には経験が不足し、老人には体力が不足するからであろう。

AACKも七十周年を迎えて、老齢化してきたのではないか。京大山岳部への入部者が極端に減ってきたと聞く。若者は硬直した思考しかできない老人には、魅力を感じないという証拠ではないかと懸念する。若さを維持するには文化大革命を

繰り返す以外にない。

処女峰がなくなり、地図から空白地帯が消えたからといって、AACKの役割がなくなったなどと考えるはいけないと、私は思う。AACKは若者たちに夢を与え続ける義務がある筈である。

今西から学んだノウ・ハウを駆使して、アフガニスタンにカラコルムの雪解け水を通水し、緑の沃野を広げることの方が、米軍の空爆よりもずっとテロを撲滅するのに効果的ではないか。AACKのメンバーには、氷雪学や農業工学の大家やプロジェクト・リーダーになれる政治家もいるではないか。

人類の敵は人間ではなく、貧困と無知でなければならぬ。世界の僻地に押し込められている人々を、貧困と無知から解放してやるのが、AACKの次ぎのバイオニア・ワークではないか。著者短介・探検部で活躍。旭有機材工業勤務。勤務中のスイス滞在を利用して、ブライトホルン(四一七五)、アラリンホルン(四〇七二)登頂。また、最近(二〇〇一)はカムチャッカのクリュチエフスカヤ(最高峰。四七〇〇メートルまで到達)。

ビデオ

『ヒマラヤへの道』AACKの七〇年』を観ての感想と提案

北村 泰一(理・地物 一九五四)

ビデオ『ヒマラヤへの道』が、平井一正氏の努力により完成した。資料を全部集め、それを理解し、シナリオをつくる。これは大変な仕事だ。

これは、AACKの七〇年の歴史を概説してあるものだが、一見して立派なものだと思った。AACKとは何と立派な山岳会だろうと思った。戦前は、事実上の初代の今西、西堀、桑原氏など、ここに列挙できないほどの人材に恵まれ、その時節々々に応じた活動がなされた。そのキーワードは『探検』であった。『初』に通じるものは『探検』である。AACKは、京都(大学)学士(山岳会)とはいいながら、その底には初探検があつた。私は、卒業以来、種々の団体に関係した。しかし、AACKほど、『哲学』をもち、実績も積んでいる団体はない。

と言うと聞こえは良いが、よく考えると、これこそ『弱者が強者に対抗する方法』ではなかったか。AACKは、『すごい』山登りは出来ない”とは、巷の噂である。だが、『すごい』山登りが出来なくとも、山岳会として存在感があるのは、この(初登主義)お陰ではないのか。そんなことを口には出さないが、今西氏らの心の奥の奥にそんな思いがひそんでいなかったかと、そうした想像をするのである。

上尾庄一郎会長と平井一正映像史製作委員長の名で、ビデオに付けられた『映画史、ヒマラヤへの道』ご送付について」という文書には、このビデオが外部向けに製作されたとも内部むけに製作されたとも書いてない。しかし、前稿の山口氏の文をみると、このビデオは内部向けとして製作されたらしい。だから、全員に配つたのであろう。外部向けなら全員に配るはずがない。

何度もビデオを観ている間に思った。このビデオは、「外部の立場」と「内部の立場」では、ゴロ

りと評価が異なるのではないかと。

外部の立場というのは、A A C Kのことを何も知らない第三者や、A A C K会員であつても、A A C Kのなりたちや細かいことを知らない若い世代の人達の立場を言う。そうした人々は、ただただA A C Kとは素晴らしいグループだと思つたらう。A A C Kとは何と素晴らしい山岳会だ。何とすごい遠征ばかりをやつてきて成功してきた山岳会だ、こんな山岳会は他に類例を見ない、とただただ賛辞を抱く。このところ、若い世代が入会しないA A C Kだが、彼らも、『初登頂主義』を信じてその実行に邁進してきたA A C Kは凄い、との感想をもつたらう。

実際、若い世代にビデオを観ての感想を尋ねると、『マイナスとかプラスなどの批判を持つことは出来ない。感想しか述べられない。それは「凄い」の一語に尽きる……』という。

その反対に、内部の人間であり、また、あのビデオを内部向けに製作したものと理解していると、観る眼はコロリと変わってくる(本号、山口克氏の記事参照)。

自身は、A A C Kの戦前・戦中のことは知らない。だから、大興安嶺探検やポナベ探検などのことは、ただ美しく立派なものとし映らない。悪い批判はなにもない。ところが、戦後の私達の時代の話になると、自分の思いとビデオの内容とは少し異なる、と感じる。

私は半分内部の人間であり(卒業後十年くらいは京都にいた)、半分は外部(その後は福岡に移つた)の眼を持っている。だから、そのような者が観る場合は、観る立場で、その評価が一八〇度変わる。

内部の人間からの眼でみると、どのように感想が変わるのの例を挙げよう。

例えばヤルンカン。山が八五〇メートル、勿論未踏峰。ヤルンカンはA A C Kが目標としていた八千級の山。A A C Kの総力をあげての遠征であつた筈だ。初登頂者は上田ポッポ(豊氏)と松田ランブ(隆雄氏)の二人。だが、帰途、二人はヴィヴァークを余儀なくされるが、間もなくかぶつていたツエルトが突風のため飛ばされる。止むを得ず、危険な暗夜の下降が始まる。酸素不足のため、夢と現実との区別がつかない。ポッポはランブと離れ離れになる。やがて、ポッポは意識朦朧のまま救援隊に助けられられたが、ランブの消息は誰にも判らなかつた。そこに、折れたピッケルの柄だけが残されていたという。

これは、物語として大変な山場だ、と思つて観ているのに、その扱ひの余りの軽さ。文字どおりサラリと流す……という感じ。ランブの写真は出たが、生存して降りてきたポッポの写真も出ない。誰か写真に写つた名前はない。

A A C K会員には、垂直タイプ(ヒマラヤ)の人間と水平タイプ(極地)の人間がいる。上田豊氏はヤルンカンの前、一九六九年には日本南極観測隊第十次越冬隊員として、雪上車ながら一二〇〇キロも南極大陸深くを駆け巡り、(水平)を実践した(後年、三千キロ(一九八五)、二千キロ(一九九二)を夫々走破した(私は、犬そりで年間一六〇〇キロ(一旅行としては五百キロ)しか走っていない)。そしてヤルンカン(一九七三)。これはまぎれもなく垂直。しかも日本人による初登頂として最高高度に達し、破られることのない記録を作

つた。彼は生還し、その上、仕事(雪氷学)の上でも一家をなしている(名古屋大学教授)。彼は水平と垂直を兼ねた、例のない珍しいタイプの人物だ。限りある長さの中に、何もかも含められないことは知っている。また、人により、シナリオの強弱が異なることも理解している。しかし、ヤルンカンはA A C Kの総力挙げての遠征ではなかつたか。八千メートル級の高峰は、A A C K長年の夢ではなかつたか。その遠征の目的をランブとポッポが果たす、命を賭して。八五〇メートルの初登頂は、日本的にみても記録だ。ランブが死亡し、ポッポが生還したことは、誰が考えても大変なことだと思つたが……。

梅里雪山の扱ひも軽い。あれだけの遭難者が出たのに、遠征が簡単に紹介されただけ。梅里雪山遠征の経過や当時の状態など語つてもよいのではないか。この遭難のA A C Kへの影響や、遭難の様子など、語つてもよかつたのではないか。

そうか、わかつた！このような、平坦な山場のないA A C K物語のシナリオの組み立て方は、何も知らない第三者が作つた、と考えたらあり得ることだ。ひよつとしたら、平井氏は、そんな第三者に資料をわたし、あとの仕事を全部任せただけではないか？との悪い想像さえ抱かせる。

インタービューも気になる。八方美人になる必要はないが、登場人物が偏つている印象は免れない。もう一つ。

京大山岳部・A A C Kには他にない特徴がいくつもある。内部向けならそういう特徴もおりこんでも良かったのではないか。A A C Kと京大山岳部とは厳密に言えば異なるとはいいいながら、構成

員の大部分は京大山岳部出身者である。だから、AACKには京大山岳部の性格がブンブン匂う。

K12でも、内地の山でも遭難はあった。しかし、石橋を叩けば渡れない。遭難は、起こるものとして考えること(西堀氏の口ぐせ)。こと(遭難など)にあたっては創意工夫、その時々困難を避けるという力量こそAACKのもつ力であり、リーダーに要求される力量であるのではないのか?それでも失敗はある。ただ、一つの失敗(遭難)が、他の遠征にどのように生かされたかが、または、生かすべく努力がなされたかでコトが決まる。それらが、あのビデオに全く出ていない。

京大山岳部は体育会に属している。運動部というのは「肉体(からだ)」の部だ、「頭」は要らない、と思われ勝ちだ。だが、京大山岳部は『一種の精神団体である』と喝破した先人がいる。そのような教しえは、あのビデオから掴みとれない。

わかつたぞ!これは、AACKの特徴を出さず、美しいところばかりを出した外部向けの宣伝ビデオに違いない!こう考えれば、あのビデオに合格点をつけられる……、というのが、少し内部を知っている者の感想だ。

そこで提案する。

将来、遠征のみならず、AACKの歴史そのものを研究する必要性が出てきた場合、それが出来るように、ナマの記録を保存しておくこと。私は、公開はされていないが、山口克氏の語る、戦後京大旅行部から京大山岳部が分離した経過を語るビデオをみたが、これなどは大変貴重なものではないか。もつと、他の人の意見も残しておくべきだ。

できれば、内部むけに、もう一種類、京大山岳

部、AACKの歴史をビデオ化しておくこと。これが、二本になっても三本になっても良いではないか。費用がかかるだろうが、多少の費用はよいではないか。

私は、京大山岳部の特徴を密かに誇りとしてきた。その人の人生観にもよるが、私は、山に登るなら、どこにでもある山岳会と同じ登り方をしたくない。

これは、別の言い方をすれば、AACKのやり方が、(力の弱い者が力の強い者に立ち向かう唯一の方法)だと思えるからである。だから、単に凄い岩壁を登ったり、極地を一人で歩いたりする(実際、そんなことは私には出来ない)ことで他に勝負を挑むより、別の方法で勝負を挑む方が身に適っている。それが、京大山岳部、AACKの『山の登り方、考え方』の特徴なのだ。その究極が『初登主義』だとも言える。

その特徴ある考え方の多くは三高山岳部からの伝統だとは聞いていたが、ポツになった山口氏のインタービューを観て、やはりそうかとはつきり納得した。私は、三高山岳部がそう考えた由縁を知りたいと思った。

今、日本書紀を読んでいる。昔、小学、中学時代(戦前)に学んだ日本古代史は美しく、素晴らしいことばかり。万世一系の天皇家が一二四代(昭和天皇)も続いている。そのことを不思議に思っ先生に尋ねると、それが日本の世界に冠たる国の由縁である……と教えられた。ナルホド、オーストリーのハプスブルグ家にしても何にしても、精々数百年続くのがおちだ。

ところが、現在、一寸注意深く読むと日本書紀

の記述に矛盾が目立つ。何ヶ所にも矛盾がある。しかし、日本書紀の成立(七二〇)から一三〇〇年弱もたった今となつては、それらをタダしようがない。それは、当事、そのもとなつた文献を焼却してしまったからである。平安時代(七九四〜)にも焚書があつたという(神皇正統記)。

後代、AACKの真の歴史を研究するのにこうした轍を踏ませたくない(今のうちに、ナマの記録をもつと集めよ、保存せよ)。

ビデオ『ヒマラヤへの道』を視て

睦好 正治(農・農林 一九九〇)

「花嫁の峰チョコゴリザ」以外にも、白頭山・大興安嶺・ポナベ島・アンナプルナなど、素晴らしい映像が残っていたんだな。素直にビデオに引き込まれてしまいました。

このビデオは、平井ポコさんの監修ということ、多分にポコ色に染まっているに違いありません。今まで先輩方から聞いた話や、読んだ本から得た知識により、ポコ色を薄めて客観的に視ようにも、映像のリアリティは全てに勝るのです。

一時間弱の長さにも手頃で飽きさせず、映像が残っているのならカット編集する前のフィルムを視てみたいとも思いました。

やや自画自賛気味のストーリーで、会員外の方が視れば、うんざりするかもしれません。しかし、創立七十周年記念事業なんだから、そういう筋立てでも良いのです。

細かいことを言えば、ヤルンカンは一八千メートル峰として世間に認知されていないのでは、とか、

九十年度のシヤパンマ隊は、主峰の頂には立つておらず中央峰（八〇〇メートル）に登頂したのではないか、など疑問に感じられるところもあります。

ビデオの中では、A A C Kの行く末を案じています。山岳部の自分の前後の世代には、学者でありながら素晴らしい現役の登山家が何名かいます。そういう輩に限ってA A C Kには絶対入会しませぬ。私のような会社勤め（おっと、私は今は、無職だけだ）ではなく、本来なら君たちが登山と学術のバイオニアワーク担っていくべきなんじゃないとつねづね思います。彼らは何故A A C Kに近づかないのか。だいたい想像はつきませんが、ニューズレターに書くこうとは思いません。

若い人達が勇気をもてるかどうか。A A C Kには輝かしい歴史があると思うかもしれないが、かえって、A A C Kのヒストリーってヘビーだなあと感じるかもしれません。大方そんなもんです。ただ、人の感じ方は様々です。千人に一人でもA A C Kのバイオニアワークに触れ実践してみたいという若者が出てくればそれで良いじゃないですか。多くの若者の目に触れさせるにはどうすれば良いか、それが今後のこのビデオの課題なのではないでしょうか。

かくいう私は、「K12峰遠征記」を読んだことがきっかけで京大山岳部を志したのです。

梅里雪山二〇〇一年の遺体搜索活動の報告

小林 尚礼（工・衛生 一九八八）

「編集子註」以下の文中に、わかり難い記号や記述があるが、これは、遺品の手帳の内容を出来るだけ忠実に再現したことによる。

今年は、小林が写真撮影を兼ねて三月～五月と八月～九月にかけての約四ヶ月間明永村付近に滞在し、五回の遺体搜索と現地関係者との協議を行った。以下はその報告である。

（一）搜索の日程（二〇〇一年）

五月十三日 氷河搜索（小林十村民二人）・（宗森隊員、遺骨遺品十五キログラムを発見（一部は一九九九年発見済））

五月中旬 明永村村長と徳欽県体育運動委员会主任の高虹氏に、村人による氷河上の搜索を依頼。

六月十八日 氷河搜索（村民三人）・身元不明の遺体、遺骨遺品二十キログラムを発見。

七月二四日 氷河搜索（村民三人）・遺骨遺品二十キログラムを発見

八月十五日 氷河搜索（小林十村民二人）・遺骨遺品十キログラムを発見

九月二四日 氷河搜索（小林十村民一人）・わずかな遺品*を発見。

*クレパスに阻まれ、遺品が散乱している場所へは近づけず。

九月二七日 収容した遺体と遺品をおろし、大理市で火葬と遺品の確認。

九月二九日 雲南省体育局弁公室主任の張俊氏へ今年の作業の報告。

九月三十日 小林帰国、出迎えのご遺族九組へ遺

灰遺品の返却と報告。

（二）持ち帰った遺骨・遺品

（遺骨）一・宗森隊員遺骨、二・DNA鑑定用の検体とその遺骨を三組、三・身元不明の遺骨。

（遺品）井上隊長・ヘルメット、船原隊員・予備手袋、近藤隊員・装備袋・手帳・ヘルメット・ゼルプスト、宗森隊員・サングラス、笹倉隊員・シュラフカバー、米谷隊員・装備袋、佐々木隊員・羽毛ズボン・装備袋、清水隊員・装備袋、

（三）明永氷河の動き

遺体や遺品は、明永氷河の中間に位置する緩傾斜部を約三年かけて通過し、今年の九月にはほぼ全てがその下流に位置する急傾斜部へ入った。この急傾斜部はセラックが多く常に崩壊しているので、遺体遺品の収容作業は困難である。急傾斜部のさらに下流は、再び歩行可能な平坦な氷河が続いており、数年後には遺品などが到達する可能性がある。なお、一九九九年に行った簡易測量によれば、明永氷河の流速は約三八〇メートル／年であった。

（四）未確認の遺体

これまでに、遭難隊員十七人の内、十四人の遺体を確認している。未だ確認されていないのは、清水久信隊員、船原尚武隊員、スナツリ隊員の三人である。また、これまでに発見された遺体で身元を確認できなかったものが四組ある。ここでの数は、体の一部だけ見つかったものも含んでいる。今年には特に未確認の三人の発見に力を入れたが、確認できるには至らなかった。氷河上から収容できる最後の機会となる可能性もあるので、身元不明の遺骨の一部を持ち帰り、家族の了解を得て、

DNA鑑定による身元確認の可能性を再検討しているところである。

(五) 今後の対応

来年以後は急傾斜部に入り、この三年間と同様の捜索活動はできなくなる。今後、基礎データを基に遺体などの移動を検討して、来年以後の対応を協議する予定である。現地の高虹主任や明永村長には、来年以後も協力をお願いしたいと伝えている。

明永村長は「村の水源の問題があるので監視を続け、何か出たら連絡する」と話している。

梅里雪山の遺体捜索活動は今年が一つの節目になる。過去四年にわたる収容作業を整理し、内外に報告すべきであると考えている。

(六) 雨崩村で聞いた恐ろしい話

今年八月に雨崩村（笑農ベースキャンプの手前にある村）を訪ねた折りにAACKの登山隊に関連する幾つかの話聞いた。

一、一九九六年の第三次梅里雪山登山隊が帰って十六日後、登山隊が宿泊施設に使用していたB Cの放牧小屋を大雪崩が襲った。その日三キロメートル以上離れた雨崩村にも雪崩の轟音が響き、後日村人が見に行ったところ六、七軒あった小屋は全て倒壊して、数十メートル吹き飛ばされていた。その状況から、突風性の雪崩ではないかとのこと。私も現場を見に行ったが、小屋はほぼ元の位置に再建されているものの、小屋付近の大木は全てなぎ倒されて、同じ方向に横たわっていた。幹の直径が一メートル以上ある木が何本も含まれている。一九九〇年や一九九六年の写真をみると、笑農のすぐ上流側には雪崩が木を倒したあとを確

認できるが、小屋の辺りは木に囲まれて安全に見える。村の老人達も、笑農の小屋が雪崩にやられたことは聞いたことがないと言う。

一九九六年登山隊の中山茂樹隊員にこの話をしたところ、あのとき登山を続行していても十六日はかからなかったのではないかとのこと。しかし、二次隊の遭難に続いて、三次隊も予測し難い大規模雪崩に遭遇する可能性があったということは、不気味だ。

二、一九九〇年の偵察隊以後、雨崩村民のC一、C二参りが続いている。九七年には雨崩村の僧侶を含む三人がC一で九六年隊が残置した大量のザイルを見つけた。帰路、ラッパ口付近で僧侶はセラックの崩壊に合い、転落して即死した。

今回も私と笑農へ行った村民は、私を小屋に残してC一まで上がっていった。五時間半程度でC一の先まで見に行き、数十メートルのフィックス・ロープとカラビナ数枚を回収してきたのには驚いた。恐らく遭難隊のものだ。聞くと彼は、C一付近でヒドンクレバスに落ちて危機一髪だったという。更に下降時にはスピードを上げるため、回収したアイスピトン氷を打ち込んで、十一年前のザイルに体重を掛けて下りてきたという。私はその危険性を伝えることしかできなかった。これは彼らだけの責任ではないだろう。

三、一九九六年の登山の際に多くの登山装備が盗まれたが、あれは雨崩村民だけの仕事ではないらしい。隊の内部の人間が関係した場合もあったという。ウィンパーテントは、数千円で売れたようだ。私は怒りを感じるよりも、彼らの強かさに呆れて、地元民たちとどのようにしか接しえな

った登山とは何だろうかと思った。

(七) 今年発見された近藤隊員の手帳から、遭難前

夜までの記録

【注：「・・・」は読み取れない文字。一月三日についてはすべての記録を掲載】

十二月三十日 曇り時々晴れ C三からC一を往復（荷上げ）。

十二月三十一日 晴れ C三Stay。

一月一日 曇り時々雪 C三からC一を往復（荷上げ）

*テントサイト（ウィンパー一、エスパース四、アンテナ二）のスケッチあり、C三か？

一月二日 雪 C三 Stay

一月二日 雪 C三 Stay。八時三十分おきるお茶、・・・、ビスコ

依然雪 ひまわりでは雲の大陸の東寄りの真只中、テントラッセル二Hrs位が必要。全くwhite out

十二時すぎ、二個のバッテリーアウトが発覚。決死の発々隊、広セとETO、PKN FAXに間に合う

【注：「広セ」は広瀬隊員、「ETO」は笹倉隊員、「PKN FAX」は北京発信の気象ファックス】

昼食 十三時～十三時半・メシ（かつおぶし、しょうゆ、ザーサイ）・牛焼肉・スープ（中華（チキンコーン）、牛肉、ホールン）、依然雪、C

三が徐々に埋没してゆく

十五時半よりあみだでテント内引越

旧、後・工藤、HRS、B、KND、FNH、MZ、ETO・前

【注：工藤、広瀬、兎玉、近藤、船原、宗森、笹倉】

新・後・FNH' MZ' HRS' KIND' ETO' B' KDO・前

【注・船原、宗森、広瀬、近藤、笹倉、児玉、工藤】

日中会議、四時〜四時四五分

(日方のみ)

・BCより食料上げる、中バコ十一パック以上ある↓二六四人日↓十五日/十七人

・天気、一/四少し回復、一/五悪、一/六、七好天

・MSG' MZ' B' ETO' ZMSG五人、一/五にC三↓C一

【注・米谷、宗森、児玉、笹倉、佐々木の五人】

・MSG' MZ' B' ETOの四人、一/五〜C一滞在

【注・米谷、宗森、児玉、笹倉の四人】

・一/六、好天ならアタック隊C三↓C四(六人) サポート隊C三↓C四(五人) 以後アタック体制

(日中十四人、十六時二十分〜四五分)(井上)

・あすは一日ナダレ待ち必要、アタックは早くて一/五〜一/八。となると食料没有、故BC↓C一食料荷上げ必要。従って隊員C一滞在する

・一/五、JPN五人C三↓C一、うち一人は↓BC

・一/六、(協) 六人BC↓C一、うち三人C一滞在

・一/七、八、(協) 三人BC↓C一、三人C一↓C二

・アタック一/六、一次六人十五人C三↓C四一/七、(ア) C四↓C五

一/八、(ア) C五↓Smt↓C四

・二次隊は天気次第
(宋) ・二つ質問、BCの食料は? 十七人で何日?

(佐) ・ヨビ合わせて月末まで、今回の予定は十五日まで

(宋) ・OK、BCからの荷上げ金さんと相談してくれ

・BC五十五〜六十センチ、ユイボン六〜七センチ、DON三〜四センチの積雪 【注・DONは徳欽】

・DONの予報、きのう八時〜今日八時悪天

・最後に一つ、白馬山口は通行不能です

・会議後十七時二十分より、ピンサロメンバー七人総出で大テントラッセル

・テントの回りほぼ一メートルの空間を・・・の店のレベルまで足ぶみ

雪かき、その間も雪は容赦なく降り続けている。
【注・ピンサロはテントに付けた名称】

夕食二十時二十分〜五十分

メシ(かつお、しょうゆ、・・・、マヨネーズ)ズッペ(中華とりコーン、・・・、牛肉、・・・、ホーレン、コーン)

延々二十二時三十分までテルモスのお湯作り、しんどい。

二十二時三十分からチーズ・サラミのフライパン炒め

(絶筆) *このページにシャープペンシルが挿まれている

【注・連絡の途絶える直前の午後十時半までの記録が記載されている。降雪が多く、テントのラッセルに苦勞しているのがうかがえるが、この日まで、一月五日からアタック可能と判断していたようである】

「ペルケオ」の研究

寺本 巖(工・工化一九五四)

まえがき

いつも格調高い記載ばかりの「AACCKニューズ・レター」誌に、こんなふざけた投稿をと躰感を買って心配である。が、楽しかった「岡山の山に登る会二〇〇一」の参加者のみなさんの煽りに乗って、奮勇をふるってAACCKのAcademismに挑戦することにした。題して「ペルケオの研究」。

実はもう二年も前になるが、ふとしたことから「ペルケオ」のことを詳しく知りたくなって、いろいろと調べた結果、以下のようなロマンチックな由来を知ることができた。

ペルケオ (Perkeo) 由来

ペルケオは、一七二〇年頃、カール・フィリップ公 (Karl Philipp、在位期間一七二六〜一七四二) に仕えていた宮廷道化師で、ハイデルベルグ城の地下ワイン倉庫の樽の番人が仕事だった。

小男だがワインが大好きで、一日十八本ものワインを一人で空けたそうである。イタリアの出身で、いつもワインを勧められる度に、イタリア語で「ペルケ・ノ?」(英語の「Why not?」、日本語

では「飲まいでかー」と言って飲んでいたので、ドイツ人にはそれが「ベルケオ」と聞こえ、こう呼ばれるようになったという。

また、茶目つ気もあり人をからかうことが好きだった。びっくり箱（ひもを引っ張らせると、チャイムが鳴りキツネのシッポが飛び出す仕掛け）でご婦人方を驚かせ、失神したご婦人を介抱するのが楽しみだったとか。

そんなワイン大好き大酒飲みだったが、ある日人から勧められてワインの代わりに飲んだ「たった一杯の水」が原因で死んだそうである。何という悲しくも酒飲みらしい死に様ではないか。

なお、別の文献では、本名「クレメンス・パンケルト (Klemens Pankert)」と言うインスブルック出身のポタン製造職人であったと言う説もある。フィリップ公の命により十三万リッター（一七五〇年には改造され二十二万リッターとなる）のワインを甘んじて飲まねばならなかったという。しかし、こちらの伝説はあまりおもしろくないので、独断で無視することにする。

「山岳部ベルケオ」

ここまで調べて、こんなすばらしい「ベルケオ」をもっと知りたくなった。思い出したのが、むかし山岳部で「ベルケオの歌」として教わった歌である。うる覚えながら、その歌詞は以下のようである。

ハイデルベルクのお城の中に、一寸法師のベルケオが住んでいた。

なりは小っちゃくて、コマチャなれど、飲むに掛けては大男。

隣近所では野暮で通れども、ベルケオ自身はこう言った……

『ダスカンデルエステルロー、ダスカンデルエステルロー……? ? ? ? ?』

知りたいのは、カタカナで書いた部分の、正しいドイツ語文である。その中にきつと、まだ知らない「ベルケオ」が描かれているに違いないと思つたのである。ドイツ語の達人と自他共に許す、広瀬幸治・平井一正のお二人に聞いたが、どちらも知らないと言う。

広瀬先輩のサジェッションで、東京のドイツ大使館にメールで問い合わせたが、梨の隣であった。平井は少し興味を持ったのか、芳賀孝郎を通じて学習院大学の木下是雄先生（ニックネームがベルケオだとのこと）に聞いてくれた。その結果、以下のような歌詞が芳賀からFAXされてきた。

「木下ベルケオ」

ハイデルベルクのお城の中に、一寸法師のベルケオが住んでいた。

なりは小っちゃくて、コママッチョなれど、飲むに掛けては大男。

隣近所では馬鹿と言えど、ベルケオ自身はこう言つた……

Was kommt dort von der Höhe?

Was kommt dort von der Näh der Höhe.

ga, ga, Näh der Höhe.

Was kommt dort von der Höhe?

Passt der Postillon, Passt der Postillon.

Passt der Postillon eh, Passt der Postillon.

「山岳部ベルケオ」のカタカナ部分にドイツ語が埋められたものの、どう見ても「ベルケオ」に關係ない詩だと言う新たな疑問が生じた。

ここまでの調査結果をもって、昨年の「岡山の山に登る会二〇〇〇」（川崎徹 AACKニューズ・レター#十九、二〇〇一）に、議題として提出した。しかし、川崎の報告にもあるように、「碩学達からいろいろの意見が百出したが、結局、先輩たちから受け継いだドイツ語歌詞は意味不明、いかげんなドイツ語歌詞であるという結論に落ち着いた」のである。それでも残る疑問は、

Q一、なぜ、「木下ベルケオ」のドイツ語部分は「ベルケオ」に關係ない歌詞なのか？
と言うことである。

「大学祝典序曲」

消化不良のまま、その後も「山岳部ベルケオ」のことが気になっていた。少なくとも、あのメロディはどこかでよく聞くなあと思っていたが、ある時ふとそれが、ブラームスの、「大学祝典序曲 (Akademische Fest-Overture op.80)」に出てくるメインメロディと同じであることに気がついた。

ここでまた疑問が発生した。

Q二、どうして、ブラームスが「ベルケオ」に關係あるのか？

と言うことある。ヨハネス・ブラームス (Johannes Brahms) は、十九世紀（一八三三〜一八九七）の音楽家であり、前述のように十八世紀のわが「ベルケオ」からは約百年も後の人である。その接点はどこにあるのか？

「Patkeo」楽譜

一方、平井もだんだん気になってきたらしく、

得意のドイツ語でHeidelbergのRathausへ直接手紙で問い合わせたらしい。「山岳部ベルケオ」のカタカナの部分はどう書いたのかは聞きそびれたが：。収穫があった。「Perkeo」と題する歌の楽譜を入手したのである。鬼の首でも取ったようなその楽譜によれば、作詞はV.Scheffel（一八四六）、作曲は十五年後Stephan Grunwe（一八六一）となっている。先に作られたのは詩の方である。その一番は次のとおりである。

Das war der Zwerg Perko im Heidelberger Schloss,
an Wuche klein und winzig, an Durste riesengross.

Man schalt ihn einen Narren, er dachte:

『Liebe Leut, wart ihr wie ich doch alle feucht-frohlich und gescheut!

Wart ihr wie doch alle feucht-frohlich und gescheut!』

ここに、「山岳部ベルケオ」の日本語の歌詞は、シェッフェルの詩の和訳であることがわかったのである。しかし、新たに第三の疑問が生じる。

Q三、どうして、大詩人シェッフェルが「酒飲みベルケオ」の詩を書く気になったのか？

ヨーゼフ・ヴィクトア・シェッフェル (Joseph Viktor von Scheffel) もまた、ブラームスと同時代十九世紀（一八二六〜一八八六）のドイツの作家であり詩人である。わが「ベルケオ」から、百年以上も後の人である。

平井入手の楽譜は、さらに問題を複雑にする。確かに題名と歌詞は「ベルケオ」だが、上記グルーヴェが付けた曲の、

Q四、「Perkeo」のメロディが、「山岳部ベルケオ」

のそれと全然違う！

のである。これが第四の疑問である。ソプラノ歌手の岡崎順子先生の所へ楽譜を持って行って、ピアノの弾き語りでもドイツ語で歌ってもらったりもした。しかし、曲が違うと言うこと以外なにも事態は進展しなかった。かくして、一年近くが過ぎ「岡山の上に登る会二〇〇一」が目前に近づいてきた。（なお、平井入手の「Perkeo」楽譜は一部に欠陥があることを何人かに指摘された。後に山口克先輩から正しいのが送られてきた。）

【狐の歌】

そして十月六日の今西錦司生誕百年シンポジウムの時、山口克先輩にお目にかかったことが偶然とは言え僥倖だった。ちょうどドイツ学生歌のCD作りに凝っておられたのである。三十一曲を収めたCDコピーを、それらの歌詞・和訳・解説を書いた小冊子を付けて送っていただいた。なお、山口先輩は、一九二二年版の「Allgemeines Deutsches Konnersbuch (学生歌集、酒宴歌集)」の原本を前田司を通じて入手されているとのことである。

さて、その山口CDを聞いてびっくりしたのである。三十一曲の最初に飛び出してくる歌のメロディは、まさしく「山岳部ベルケオ」のメロディそのものではないか。と言うことは、ブラームスの「大学祝典序曲」に出現するメロディでもあるのだ。あわてて題名と歌詞を見る。しかし、期待は無惨にも裏切られた。題名は「BEIM FUCHSENRTT ZU SINGEN (狐の行進を迎える歌 狐狩りの歌)」であった。「ベルケオ」ではなかった。そして、二十番まであると言われる歌詞の一

〜三番は、次のとおりである。

Was kommt dort von der Höh?

Was kommt dort von der ledernen Höh!

ga ga ledernen Höh!

Was kommt dort von der Höh?

Es ist ein Postillon,

es ist ein lederner Postillon,

ga ga Postillon,

es ist ein Postillon!

Was bringt der Postillon,

Was bringt der lederne Postillon,

ga ga Postillon,

Was bringt der Postillon?

これは、先の「木下是雄ベルケオ」のドイツ語部とほぼ一致する。と言うことは、やはり「ベルケオ」に関係ない歌詞なのである。

山口先輩労作の冊子と、別の文献調査とから、もう少しこの「狐の歌」についてふれておきたい。「狐Fuchs」とは、学生用語で「新入生」のことである。題名の「狐の騎行Fuchsrittを迎える」というのは、山 (Hohe) で囲まれた大学町へ新入生が馬で到着する様を描いているのである。二番以降に出てくる「郵便馬車の御者Postillon」のくだりは、「新入生Fuchs」となる学業希望者を乗せて来るといふ情景なのであるが、「ベルケオ研究」の主題からはいよいよ遠くなるのでこの辺で深入りしないでおこう。ただ、この「狐の歌」は、十八世紀からの伝承歌であって、作詞者も作曲者も不

明であることを追記しておきたい。元歌と思われる詩句や旋律についてはいろいろな説があるが、いずれも推測の域を出していない。

さて、「狐の歌」の出現によって、却って謎は増えてしまった。すなわち、

Q五、「狐の歌」のメロディがブラームスの「大学祝典序曲」の中に現れるのはなぜか？

Q六、「山岳部ベルケオ」は、メロディは「狐の歌」だが、歌詞が全然違うのはなぜか？

問題の解明

問題を整理してみよう。まず、わかったことは、「山岳部ベルケオ」のメロディは、「狐の歌」のそれである。

「山岳部ベルケオ」の日本語部分の歌詞は、シエツフェルの「Perkeo」の和訳である。

一方、まだ解決していない点は、

一、詩人シエツフェルが「Perkeo」の歌詞を作った動機は何か？二人の接点は？

二、「狐の歌」のメロディが、ブラームスの「大学祝典序曲」にも「山岳部ベルケオ」にも、現れるのはなぜか？ブラームスとベルケオの接点は？

そして最後に、

三、「山岳部ベルケオ」のカタカナのドイツ語部分

『ダスカンデルエステルロー、ダスカンデルエステルロー、……』は、いったいなんなんだ？

もったいぶらないで、結論を急ごう。

まず疑問の二であるが、先にも少しふれたが、ヨーゼフ・ウィクトア・シエツフェル (Joseph Viktor von Scheffel・一八二六～一八八六) は、十

九世紀のドイツの詩人であり歴史小説作家である。カールスルーエで生まれ、カールスルーエで死んでいる。若い頃、ミュンヘン、ハイデルベルグ、ベルリンの各大学で法律を学んだ。のち、フランクフルト・アン・マインで官吏の職を得て、ゼッキンゲンで法律を担当する。そこで書いた長編叙事詩「ゼッキンゲンのラッパ手 (Der Trompeter von Säckingen, 一八五四)」は、彼を国民的人気作家に仕立てあげた。しかし、若き日のハイデルベルグの学舎を忘れることができず、やがて役所の職を捨てて、ハイデルベルグへ移り住む決心をする。大学教授になろうとしたのである。しかし不運にも、目を患ったためその願望は果たせなかった。

こよなく愛したハイデルベルグにおいてまとめた学生歌集「Gaudemanns」(さあ、楽しもう)、「Lieder aus dem Engeren und Weiteren (1868)」によって、「学生文学」の分野へ足を踏み入れたのである。この酒好きの詩人は、その歌集の中に、1846年にベルケオの伝説を基に作詞した「Das war der Zwerg Perkeo (あれはこびとのベルケオだった)」を収めることを忘れなかった。ここに、詩人シエツフェルと「ベルケオ」の接点を見いだすことができるのである。キーワードは「ハイデルベルグ」なのである。シエツフェルの詩歌には、ワインのことを詠ったのが多々あるそうである。

なお、この「Perkeo」の詩は、一八六一年頃、シユテファン・グルーヴェ (Stefan Grueve・一八三八～一九〇一) によって曲が付けられて以来、現在もよく歌われている学生歌の一つとなった。もちろん、山口先輩ご秘蔵の「Kommersbuch」にも収められているはずである。

第二番目の疑問は、ブラームスと「ベルケオ」の接点である。

実は、一八七九年、プレスラウ大学が、作曲家ヨハネス・ブラームス (Johannes Brahms・一八三三～一八九七) に名誉哲学博士号を送ることを決定したのである。そして、その二年後、ブラームスは「大学祝典序曲 (Akademische Fest-Ouverture op. 80)」を作曲、感謝の辞を添えて大学の大学に献呈したのである。この序曲は、学生歌「Gaudemanns」(さあ、楽しもう)の主題で賑やかに終了するが、その前に、子供の歌にも似た活発で単純な学生歌「狐の歌」の旋律を奏でる。一度耳にしたら忘れることはない、この「狐の歌」の旋律に惹かれ、古来多くの人が学士会員になったという。山口先輩の表現をそのまま借りれば、ブラームスがいかにか巧妙に「狐の歌」や「ガウデアームス」、「ランデスファーターの歌」を編曲して「大学祝典序曲」の中に取り込んでいるか、心憎いばかりである。「狐の歌」はじめていつかの学生歌のメロディを巧みに収めた「大学祝典序曲」こそが、ブラームスと「山岳部ベルケオ」との接点なのである。なお、「狐の歌」の旋律には多くの変奏があり、替え歌も絶えず作られているとのことである。

『ダスカンデルエステルロー』

「ベルケオ」と「シエツフェル」と「ブラームス」の三角関係を解き明かせることによって、「山岳部ベルケオ」の謎は、氷解した。メロディはブラームスの「大学祝典序曲」に出現する「狐の歌」であり、歌詞は日本語部分に関する限りシエツフェル作詞の「Perkeo」を和訳したものである。この

間の事情は、「Oh, my darling Clementine」のメロディに西堀栄三郎先輩らが歌詞を付けられた「雪山賛歌」と似ていると言えなくもない。

氷解したと言ったが、大難物の厄介な疑問が残っている。

三、「山岳部ペルケオ」のカタカナのドイツ語(?)

歌詞『ダスカンデルエステルロー、ダスカンデルエステルロー、……』は、いったいなんなんだ？

この疑問が解けないまま、「岡山の山に登る会二〇〇一」の日が近づいてきた。昨年の会で、「いがかげんなドイツ語」と結論されたこの『ダスカンデルエステルロー、ダスカンデルエステルロー、……』だが、本当にでたらめなのか？それとも、やはり正しいドイツ語文の歌詞がどこかにあるのではないだろうか？

気の晴れない毎日、通勤の車の中で山口先輩の「ドイツ学生歌三十一曲集」のCDを聞いていた。「狐の歌」に始まって、ラスト三十一曲目の「ランデスフアーターの歌」まで、懐かしい歌が次から次へと出てきて、つい大きな声でいっしょに歌ってしまふ。そんなある時、はっと気がついたのである。バリトンのエリッヒ・クンツ (Erich Kunz) の歌う「狐の歌」に合わせてなんと『ダスカンデルエステルロー、……』と歌っている自分を発見したのである。そうだったのか！そうなのだ！『ダスカンデルエステルロー』は、『ヴァスコンドルフォンデロー (Was kommt dort von der Höh?)』だったのである。決して「いがかげんなドイツ語」ではなかったのだ。誤解を恐れずに言うならば、山岳部で「ペルケオの歌」を教えてくれた先輩達

の「語学力」のなせる業であろう。そのせいか、三高はじめ旧制高校OBの誰に訊ねても、「山岳部ペルケオの歌」を教えてくれたという先輩は遂に見つからなかった。

二年來の課題をわれながら見事に解決して欣喜雀躍、「大学祝典序曲」と「狐の歌」を録音したパソコン持参で「岡山の山に登る会二〇〇一」での報告に臨んだ。あと欲を言うなら、どなたがシェッフェルの詩をあんなにうまく和訳されたのか、しかし七番まである歌詞をなぜ一番だけの翻訳で止められたのか、を知りたいと思う。それにしても、われらがヒーロー「ペルケオ」の日本語歌詞を、ブラームスがそうしたように、あの愉快な「狐の歌」のメロディに載せた着想は、実にすばらしいの一語につきる。

謝辞

この報告をまとめるに当たって、ドイツ学生歌集のCDをお送りいただいた山口克氏、ハイデルベルグから楽譜を入手していただいた平井一正氏、その楽譜を歌って聞かせていただいた岡崎順子氏、木下是雄先生に問い合わせていただいた芳賀孝郎氏など、多くの方々にお世話になった。この報告が少しでも面白いものになっているとしたら、これらの方々のご協力に負うところが多い。記して感謝の意を表したい。(二〇〇一年十月三十一日)

【編集子註】

以下のお知らせは、AACRが今後どんな生き方をしようとも、井の中の蛙にならないように、京都でもこんな講演会が開催されることを希求し

て、時間的に間に合わないことを承知の上で掲載するものです。

二〇〇二年国際山岳年記念事業 「クルト・ディームベルガー講演 と映画の夕べ」

二〇〇二は国連が定めた「国際山岳年」です。この年に「海外登山技術研究会」が四十回の節目を迎えるのを記念して、下記のとおり講演と映画の夕べを開催致します。ゲスト・スピーカーはクルト・ディーンベルガー (オーストリア) です。ブロードピーク (一九五七年) とダウラギリイ峰 (一九六〇年) の八千メートル峰二座に初登頂した唯一生存するサミッターです。半世紀にわたる登山活動を通しての講演と山岳カメラマンとして収録した素晴らしい映像にご期待ください。

主催／(社) 日本山岳協会
日時／二〇〇二年二月二十二日(金)

開場 十八時

開演 十八時三十分～二十一時

会場／ワーカースサポートセンター大ホール
(旧東京都勤労福祉会館)

東京都中央区新富1-13-14

電話 03-3552-9131

地下鉄日比谷線・JR京葉線「八丁堀」

A三出口 徒歩三分

定員／五百名

入場料／大人 千円、小人(高校生以下) 五百円

問合せ／(社) 日本山岳協会事務局

東京都渋谷区神南二丁目 岸記念体育館内

電話 033481-2396

(問い合わせは、陸好ヒヨホホ(正治)氏(社) 日本山岳協会海外登山委員会) まで
(電話 03-3681-3010・宅)

京都大学総合博物館

平成十三年度秋季企画展

「今西錦司の世界—京大のパイオニアワーク—」

日時／平成十三年十二月～平成十四年三月

(四月末まで展示される可能性あり)

場所／京都大学総合博物館

(東大路・京大西部構対面)

休館日／月曜日・火曜日

二〇〇二年一月六日は、故今西錦司先生の生誕百年にあたります。今西先生は、京都大学を活動拠点として、自然科学と人文科学の幅広い分野にまたがり、生態学、社会学、人類学、霊長類学、進化理論研究などで輝かしい業績を残された。その間、山登りで培った強靱な体力と精神力、比類なき発想力と綿密な企画力を駆使し、パイオニアとしての役割を果たされた。フィールドワークを通して様々な理論を導かれた今西先生は多くの後進を育てられ、その知の流れは数々の新しい学会や研究機関となって現代も力強く躍動しています。先生の没後、おびただしい量の今西先生の活動に関連のある写真、映画フィルム、地図類、記録、資料、先生自筆のノートなどが存在することが明

らかになった。今回それら資料類を一堂に集めて、今西錦司の人間像を解明する展示を企画し、総合博物館に集積した写真類等が、一挙に公開・展示されている。

問い合わせ先

京都大学総合博物館長 瀬戸口烈司氏

電話 075-753-3271

会員動向

訃報

訂正

前号#二十二(二〇〇一年十一月号)のA1・A A C Kの登山哲学とは?(川瀬裕史)の文の最期の著者短介(六頁、中段の一～二行目)の部分を、

次ぎのように訂正します。

「誤」知床岳冬季初登頂(一九五二)時のサブリーダー

「正」知床岳冬季初登頂(一九五二)。斎藤惇生山岳部リーダー時代のサブリーダー。

編集後記

従来、編集子は文体・様式の統一や誤字その他の技術的な編修作業を行ってきましたが、複数の著者からの要望で、A A C Kの基本的な編集方針についての統一見解が出るまで、原文には一切手を触れないことにしました。各筆者はそのように了解ください。次号、五月号には、常置の「特集A A C Kのゆく道」に加えて「臨時特集 内外山行紀行」を組みます。これは、既実行の山行の紀行文のみならず、将来の山行計画(A A C K会員に対して開かれているもの。外国山行を優先します。)も含まれます。奮ってご投稿下さい。また、既掲載の文についての批判・質問があればお寄せください。筆者の回答とともに掲載いたします。

編集委員 北村泰一、上田 豊、松林公藏

発行日 二〇〇二年二月二〇日

発行所 京都大学土山岳会

京都市左京区吉田本町

京都大学工学部建築系

吹田啓一郎 気付

製作 京都市北区小山西花池町一八

(株)土倉事務所